

愛に終わりはない ルカによる福音書 10 : 25 - 27

10:25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」 10:26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、 10:27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」 10:28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」 10:29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。 10:30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。 10:31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。 10:32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。 10:33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、 10:34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。 10:35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもったかかったら、帰りがけに払います。』 10:36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」 10:37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

良きサマリア人のたとえ。隣人愛のお話です。とても分かりやすく、誰が聞いても、祭司やレビ人ではなく、サマリア人が正しいと言うでしょう。けれども、隣人愛を私たちが実際に行うとなるとどうでしょうか。皆さんは明日、月曜日から実行できますか。さほど簡単ではないような気がします。この律法学者も「実行」となると躊躇する思いがあったのでしょうか。正直な人だと思います。イエス様は、隣人愛を実践できるように、このたとえ話をされたことに間違いはありません。そこで今日は、月曜日から、いやもう礼拝の直後から、隣人愛を実行できるようになるために御言葉に学びたいと思います。今日の説教に別の題をつけることができるとすれば、「今日からできる隣人愛」とでも致しましょうか。

このお話のミソは、二つの疑問文です。第一の疑問文は律法学者が発したものです。「わたしの隣人とはだれか？」第二の疑問文はイエス様が発したものです。「誰が隣人になったのか？」イエス様は、律法学者が発した「わたしの隣人とはだれか？」という問いには直接答えず、良きサマリア人のお話をされた後で、「誰が隣人になったのか？」と問い返されました。つまり、質問それ自体を変えてしまわれたということです。ではこの二つの質問、どこがどう違うのでしょうか？皆さんお分りになりますか？

第一の質問は、自分が愛する相手をあらかじめ決めておこうとする姿勢です。どこまでが私が愛すべき人なのか？家族までか、親戚までか、友人も含める？…。愛国心という言葉がありますが、これなどは愛する対象の範囲を、同国人、同民族に決めておこうとする態度です。人類愛という言葉はどうでしょう。それなら動物は？類人猿の人権ということの問題にする人たちもいまして、法制化している国もあるそうです。他の動物は？自然環境はどうなるのでしょうか？魚の生け作りなんて、外国の動物愛護団体のひとなら卒倒しかねないですよ。蚊をパチンとやっても罪悪感を感じると言うことでしょうか？どうしてこんな話をするかということ、「誰が私の隣人か？」と、あらかじめ愛する相手を決めておくという考

えの、そもそもの「おかしさ」を実感していただきたいからです。この質問が通用するのは「頭の中の世界」でだけなのです。愛すべき相手を、頭の中で決めてしまっているのです。

現実にはそういうことはできないというのがイエス様の考えです。「誰が隣人になったのか？」このイエス様の質問には、現実には目の前にいる相手があります。目の前にだれがいるのかを私たちは選ばません。そこにその人が、そのようにして、いるということを私たちは選ばません。別な言葉で言えば、「出会い」ということです。出会いはコントロールできません。出会ってしまったのです。出会ってしまったらもう終わりです。嫌な相手でも、出会ってしまったらもう終わりです。イエス様にとって、隣人愛とは、頭の中でどうとでも操作できる、いわば観念の世界のことではなく、今ここで現に起こっているリアリティに接しているということなのです。

出会ってしまった。リアリティ接している。「今ここ」で起こっている。つまり、「あとで」が聞かないということなのです。今はできないけど、後で取っておいてやってあげましょうということが聞かないということなのです。ケガをしている旅人に「ちょっと待っててね」とは言わないのです。「今これやってるから、これが終わったら戻ってきて助けてあげるからね。」ではお話になりません。もう一つ、「今ここ」ということは、「もう前にやってあげたでしょ」とは言わないということなのです。「もうこれだけやってあげているのだから」と、取っておくことのできないものだということなのです。「今ここ」には、臨場感があります。愛は、借金も貯金もできないのです。

この臨場感あふれる隣人愛…。わたしたちに実行できるかどうかが問題です。「ちょっと待っててね。」つまり借金、「もうやってあげたでしょ。」つまり貯金。こういうことは普段やっていることではないでしょうか。これをやってはいけないと言われたら、子育てなんかできませんよ。「お母さん、遊んで。」「いまご飯を作っているから、ちょっと待っててね。」「さっき遊んであげたじゃない。」これは、愛ではないのでしょうか。いやいや、子育てと、追いはぎにあった旅人とでは事情が違うでしょ。え、本当に違うのでしょうか？なんだか頭が混乱してきましたね。

シンプルに考えてみましょう。祭司やレビ人は頭の中の世界だけで愛を考えていたのです。頭の中の世界でということ、その場とは関係なく、あれやこれや考えるということなのです。つまり、「この旅人を助けたらどうなる？」と考えるということなのです。つまり結果です。さて、助けたらどうなるでしょう。当時、祭司や祭司に仕えるレビ人は、死体や死にかけている病人に触れてはいけないという掟がありました。古代の世界のことですから、穢れが乗り移り、人々に広まると考えていたのです。ですから、助けたら、皆に大変な迷惑をかけることになります。こういう時代状況を考えると、一概に祭司やレビ人を責めることは間違いというものでしょう。

それでもやっぱり、この人を助けなければならないわけです。つまり、結果を考えていたら、助けられないということなのです。その結果には、うまく助けられるだろうか、命を救うことができるだろうかということも含まれます。結果はどうなるかわからないけれども、助けようとする。それが隣人愛だということなのです。成果は問わない。それが隣人愛だということなのです。サマリア人がもし結果を考えたらどうなるでしょう。サマリア人はユダヤ人から差別され迫害されていました。アメリカの黒人がさもないことで殺されてしまう事件が後を絶ちません。差別を受けるといことは恐ろしいことです。ある聖書注解者はこの箇所、頭の皮をはがれた白人をインディアンが助けて、白人の住む町につれて行く様子を想像するように言っています。そのインディアンは捕まえられて縛り首になりかねません。サマリア人もそういう緊迫した状況で旅人を助けているということなのです。介抱の仕方が悪い、と非難されるかもしれない。結

果を考えたら、助けることはできません。そのハードルは、祭司や律法学者同様、いやそれ以上に高いものがあつたのです。

結果はどうなるかわからないけれども、その時必要な精いっぱい行動を取る。それがサマリア人のしたことです。結果や成果は問わない。忙しい家事の中、子どもと遊んであげられないお母さん、もしかしたら、「ダメ」を言うのに、頭ごなしにではなく、遊んでほしい子どもの気持ちを受け止めながら、声の調子で優しさを伝えるかもしれません。結果は理想に届かないけれども、精いっぱいの愛情は向けられますよね。成果は問わない。その時、できることをやる。それなら私達にもできることではないでしょうか。

結果や成果よりも、そのときどの方向を向いているか、愛情を注ぐ方向に向いているかが問われるということです。さて、これで明日から隣人愛が実践できるでしょうか。ちょっとハードルが下がって、できそうな気がします。でも、まだまだ難しいと思いませんか。あと二つほど高いハードルがあります。はじめにより低いハードルについてお話ししましょう。

それは自分へのこだわりというハードルです。これも頭の中の世界だけに生きているときに起こる現象です。祭司やレビ人のハードルはまさにそれでした。「わたしは祭司だ。」「わたしはレビ人だ。」だから助けなくてもいい。サマリア人にとってもこのハードルは高いものがありました。自分はサマリアの「馬鹿者」なのだから（実際、サマリア地方には「馬鹿者」という名称で呼ばれていた町があつたそうです）、助ける資格はないと考えていたら助けられなかったでしょう。

アイデンティティと言いますね。自分について、私達は色々な決めつけを行っています。職業や身分についてだけではありません。私にはもっと大切な仕事がある。わたしは人間関係が苦手だ。わたしは頭が悪い。わたしは人に嫌われる。わたしはちゃんとできない…。こうした決めつけが、自分はやらなくてもいい、自分にはその資格がないなどと考えさせて、ささやかな愛の業から手を引いてしまうものになるのです。それが、「できないくせに」という成果主義の思いと重なると、ますますできなくなります。通りで困っている人を見て見ぬふりをする人間の心理にはこれが深く関係していると言われていています。ですから、自分というものについて決めつけをしない、柔軟な見方ができる人ほど人助けへのハードルは低くなります。

要は偉い人にならないということです。或いは自己卑下しないということです。このハードルをクリアするには、自分が無になることです。自分についての自信や、自信のなさ…信仰はそうしたこだわりとは無縁のリアリティの世界で生きることを可能にしてくれます。パウロは「自分を裁かない」と言っています。そして「生きているのはわたしではない。キリストが私の中で生きていてくださる。」と言っています。偉くもならず、卑下もしない。白紙、透明になる。私がどういう人間であるかを決めるのは神様であつて、神様が今の私を作り、遣わしてくださる。この心境が私達を自由にします。

結果や成果を問わず、その時できる精いっぱいよい。偉くもならず卑下もしない。…ときて、最後のハードルの話です。これは、愛には苦しみが伴うということです。これは頭の中だけの世界には存在しないものです。逆に言えば、頭の中の世界にひきこもっておれば、苦しみは感じないで済むということです。

血だらけになって倒れている人を見たら、誰でもギョツとして、怖くなることでしょう。サマリア人は、まだ近くにいるかもしれない追いはぎに襲われるかもしれないのです。あるいは先ほど述べたように、助けて、連れて行った先で、どんな誤解を受け、どんな仕打ちに合うかわかりません。途中で死んで

しまおうものなら、確実に自分も殺されます。「触らぬ神に祟りなし」という心境になったとしてもおかしくありません。頭の中の世界だけで生きていたなら、彼もまた立ち去ったことでしょう。しかし、彼が生きていたリアリティの世界は彼にそうすることを許しませんでした。何が起こったのでしょうか。

それは彼の心の内面で起こったことでした。「その人を見ると憐れに思い」とあります。「憐れむ」(ギリシャ語原文で、「スプラクニゾマイ」という動詞は、実は、神もしくはキリストにしか使われていない言葉なのです。このスプラクニゾマイという動詞は、「はらわた」という名詞が変化してできたもので(日本語でも「断腸の思い」という言葉がありますが)、腹の底から湧き上がってくる激情を言い表しています。これに「共苦」という訳語を当てる人もいます。神が人間を「ねたむほど愛している」という表現が旧約聖書にはありますが(口語訳聖書、出エジプト 20:5、34:14、申命記 4:34、5:9、6:15、ヨシヤ 24:19、ゼパニヤ 3:8、ゼカリヤ 8:2、ヤコブ 4:5)、それがこれです。つまりここで、サマリア人には、神の激情が乗り移ったのです。これは後に使徒言行録で「聖霊」として登場します。つまりサマリア人は、自分の心の中、いや腹の底から、自分ではどうすることもできない神様の思いが湧き上がってきたということです。

人間なら当然抱くであろう恐怖心や警戒心を彼も同然味わっていたでしょうが、そこで感じた苦痛を彼は無理になくそうと頑張りませんでした。恐怖を感じない英雄、頭の中でこさえた英雄になろうとはしませんでした。彼はリアルなひとり人間でした。けれども彼がその苦痛をありのままに感じた時に、その苦痛が旅人の苦痛と一つになり、もはや人事ではなく、そして更に、その断腸の痛みは、神ご自身の痛みとしてそこに現れていたということです。

私達が隣人愛を実行しようとするとき、頭で考えていたのとは違う、リアルな苦痛を感じるのが常です。その苦痛を避けずに心に抱えるとき、神様の聖霊が私達を後押ししてくださいます。これは不思議なことですが実際に起こります。

隣人愛は決して難しいことではありません。わたしたちはほとんど何もしなくてよいのです。ただ頭の世界を離れて、その時々での出会いの中で起こることに集中すればよいのです。その集中の三つの秘訣をお話ししました。一つ、結果や成果は気にしないこと。ただ、今できることをしなさい。二つ、偉くもならず卑下もしない。三つ、そこに湧き起こる苦しみを、避けずにそのまま自分の中に置いておきなさい。避けることに努力しない。なくすことにエネルギーを使わない。軽減しようと頭を働かせない。そのままにしておく。するとそこに聖霊が働きます。

「だれが…隣人になったか。」最後に、この「隣人になった」という動詞について説明をして説教を終わります。これは実は過去形ではありません。これは今も続いている動作を表わす動詞なのです。「誰がこの人の隣人になっているのか」が正確な訳です。愛は、達成すれば終わるような目的ではありません。愛に終わりはありません。たとえ愛する人が亡くなくても、その人を思い行う業は、尽きることがありません。愛は、結果でも成果でもなく、手柄も失敗もなく、妨げとなるはずの苦しい気持ちが逆にエネルギー(スプラクニゾマイ)に変わるという奇跡の中で起こる神様の業なのです。「誰が隣人となっているのか。」リアリティの世界で、こう問われるのは神様です。「行って、私達も同じようにしよう」ではありませんか。